28PA-am378

初年次前期の学習記録の継続性は、その後の定期試験成績と相関する

○武本 眞清¹, 木藤 聡一¹, 角澤 直紀¹, 宮崎 淳¹, 倉島 由紀子¹, 畑 友佳子¹, 荒川 靖¹, 中越 元子¹ (¹北陸大薬)

【目的】本学薬学生にとって、学習習慣の定着と学習時間の確保は大きな課題である。そのため 2016 年度より、1 年次前期に毎日の学習記録を付けさせ、それを study record (SR) シートに記録して毎週提出するような取組みを始めたが、その教育効果については確たる保証がない。そこで今回、1 年次前期の SR シートの提出率と、その後の定期試験成績との関係を 1 年半に渡って調べたので報告する。

【方法】学生の主体性を重んじ、記録する科目や時間だけでなく、SR シートの提出自体も任意とした。毎週月曜に、SR シートの配布と同時に、学生が記入してきたシートの回収と、集計後のシートの返却を行った。前期終了後には、学生個人の 15 週分のデータをグラフ化して個人々人に対してフィードバックを行った。ただし SR シートの提出を任意としたため、提出率に個人差が生じた。そこで提出率 3 分の 2 を cut-off として、全 15 回中 10 回以上提出した A 群と、9 回以下の提出に留まった B 群とに分け、その後の GPA の分布を比較した。

【結果・考察】2016 年度新入生 122 名のうち、A 群の学生は 68 名 (56%)、B 群の学生は 54 名 (44%) であった。両群の成績を比較すると、入学直後のプレイスメントテスト I (薬学ゼミナール) の成績分布にはほぼ差がなかったにもかかわらず、前期定期試験の成績には大きな差が生じていた。さらに学習記録を実施していない 1 年次後期、2 年次前期の定期試験においても、その差は維持されたままであった。今回、SR シートの提出率と定期試験成績との間には明確かつ継続的な相関関係が認められた。1 年次前期に習慣付いた学習態度や学習時間が、その後も継続されていたことが推察されるが、そのような因果関係があるかどうかの検証、ならびに提出率を上げるための仕組みの構築が、今後の課題である。